

2. 国語教育

1 研究主題

生きてはたらく言語力の育成

～言語活動を効果的に取り入れた国語科学習～

2 研究主題設定の理由

(1) 児童の実態

本校の子どもたちは素直で、学習への関心が高く知的好奇心も旺盛であり、与えられた課題に向かって真面目に取り組む子どもが大半である。読書好きな子が多く、詩や物語を豊かに読みとることができるが、自分の考えを述べたり、友達の考えをもとに話し合ったりする点で弱いところが見られる。

国語科の「話すこと・聞くこと」に関して、子どもたちは与えられた事にははきはき話したり伝えたりすることはできる。しかし、自分で考えて適切に会話することは苦手なようである。また、目上の相手に対して、場に応じた適切な言葉遣いで話すことができない子どもが多い。

「書くこと」に関しては、体験したことや事実を時系列に書けるが、目的に応じて分かりやすく書いたり、自分の考えを書いたりするのに苦手意識をもっているようである。また、量はある程度書けても、漢字が使えず、改行ができない子どももいる。

「読むこと」に関しては、音読はほとんどの子どもがすすんでできる。読書も好きで、昼の読書タイムは静かに好きな本を読むことができる。物語教材の学習では、場面の様子や登場人物の気持ちを読み取ることはでき、その発言も積極的である。しかし、読み取ったことをもとに、自分の考えを発言したり、友達の意見に反論したりする力はない。

日常生活の中でのコミュニケーション力に弱さがみられ、自分の気持ちや考えを相手に十分伝えることができず、人間関係でトラブルを起こすことがある。よりよい人間関係を築いていくには、互いの立場や考えを尊重して言葉で伝え合う能力を育成し、「伝え合う力を高める」ことが不可欠である。また、自分の気持ちや考えが相手に正確に伝わるように、場に応じた適切な言葉で表現できる力をつけさせることも、他人との関係が希薄になっている現代社会で生きていくためにも重要なことであるとする。

(2) 「生きてはたらく言語力」とは

指導要領では、「子どもたちの思考力・判断力・表現力を育むための学習の基盤となる言語に関する能力の育成のために、小学校低・中学年の国語科において音読・暗唱・漢字の読み書きなどの基本的な力を定着させたうえで、各教科等において、記録、要約、説明、論述といった学習活動に取り組む必要がある」と書かれている。

言語は知的活動の基盤として、あらゆる「知識の獲得」「能力の形成」にかかわってくる。また、思考と言語は密接に結びついており、深く思考するためには豊かな語彙が不可欠であり、言語は論理的思考力を培う基盤にもなる。さらに、言語はこうした知的活動だけでなく、コミュニケーションや感性・情緒の基盤にもなる。

したがって、子どもたちには、言語を単なる国語科授業の中の技能習得として留まることなく、各教

科領域の学習の基本となる言語力、および実生活で生きてはたらく言語力として身に付けさせたい。例えば、理科のレポートを的確に書けることや算数で論理的に筋道立てて説明できる力などである。また、日常生活の中では、学習した難しい言葉を生活の中で正しく使える、相手の気持ちを考えた会話ができることである。それが思考力・判断力・表現力の基礎となり、「生きる力」を育むことに繋がると考える。以上の理由から本校の研究主題を「生きてはたらく言語力の育成」と設定した。

言語活動を効果的に取り入れた国語科学習を行い、生きてはたらく言語力を子どもたちにつけることで、次のような子ども像を目指したい。

(3) めざす子ども像

- ①正しく美しい言葉を使い、相手を尊重して場に応じた会話ができる子
- ②すすんで読書をし、豊かで便利な生活のために本を活用できる子
- ③話している子の顔を見て、うなずきながらしっかり話を聞ける子
- ④話し合いに積極的に参加し、自分の意見を堂々と言える子
- ⑤正確に豊かに読み取り、目的に応じて書くことができる子
- ⑥昔話や古典に興味をもち、日本の伝統文化に慣れ親しむ子

(4) 国語科学習でめざす子ども像

子どもが獲得した言語力も、学習や生活で生かされてこそ、生きてはたらく言語力となる。言語を通して、互いに伝え合う学習を充実させることによって、それが身についてくると考える。伝え合う学習を成立させるために、「話す・聞く」「書く」「読む」において、具体的にめざす子ども像を次のように設定した。

「話す・聞く」

- ・相手に伝わる声の大きさや速さで、はっきりと話すことができる子
- ・相手や場面・目的に応じ、筋道を立てて話すことができる子
- ・自分の考えの根拠や理由を明らかにして話せる子

- ・大事なことを落とさないように興味をもって聞くことができる子
- ・話の要旨を的確に把握して、その内容を理解できる子

「書く」

- ・課題に対して自分の考えを書くことができる子
- ・客観的な根拠や理由に基づいて、自分の考えや意見を書くことができる子
- ・読み手が理解しやすい構成を意識して、文章を書くことができる子

「読む」

- ・場面の様子や内容が伝わるように音読できる子
- ・あらすじをつかみ、話のおもしろさやよさがわかる子
- ・書かれていることを正確にまた豊かに読み取ることができる子
- ・目的に応じて本を選択し、すすんで読書をする子

3 研究の内容

(1) 言語活動を効果的に取り入れた国語科学習

学習指導要領・国語科の「改善の基本方針」には、「実生活で生きてはたらき、各教科等の学習の基本ともなる国語の能力を身に付けること」を一層重視することが示された。この方針を受け、「改善の具体的事項」として、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の各領域で、日常生活に必要とされる対話、記録、報告、要約、説明、感想などの言語活動を行う能力を確実に身に付けることができるように指導することが記されている。

本校は42年間、国語科学習の研究に取り組んできた。平成17年から、「読解を表現に生かす単元学習のあり方」を工夫してきた。その後、指導要領の改訂で「言語活動の充実」が位置づけられたことを受けて、これまでの単元学習に「言語活動」を組み入れた実践を積み上げてきた。

言語活動は、思考力、判断力、表現力等の本質的なねらいを実現するための重要な手だてであり、授業改善のための大切な視点である。

そこで、今年度は標記の副主題を設定し、「言語活動」を効果的に取り入れた国語科学習のあり方を研究することにした。

(2) 言語活動を取り入れた単元の構想

本校では、国語に対する関心を深め、興味をもってわくわくと学習をすすめられるように単元を構成することに力を入れてきた。子どもが興味をもち追求エネルギーが持続でき、最後まで課題に向かっていける単元を構成するには、子どもの実態をしっかりとみつめ、主教材の特徴を活かしながら単元構想を工夫する発想やアイデアが必要になってくる。こうして単元を組むことで、

- ・子どもが主体的に学習することができる
- ・人との関わりができる（同学年・異学年・地域の人たち）
- ・より多くの教材に接することができる
- ・教師の教材研究の幅が広がる

等の利点が考えられるが、単元を構想するにあたり、学習内容の精選や年間指導計画が必要である。また、子どもが生き生きと活動する単元学習の中に、より効果的に言語活動を組み込んでいく必要がある。その際、次の3点に留意したい。

言語活動を効果的に取り入れるための留意点

①教材や指導目標に合致した言語活動を選ぶ。

取り上げる言語活動がどのような特徴をもっているのか、その特徴をどのように生かすことで、当該単元で付けたい国語の能力を確実に育成できるか把握しながら言語活動を行う。

②単元を通して一貫した言語活動を位置づける。

自ら学び課題を解決していく能力の育成を重視するために、個別の活動を並べるだけでなく、単元を通して目的意識や関心の高まりを生むような言語活動を位置づける。

- ・導入では、単元を貫く言語活動について見通しをもたせる。
- ・展開で教科書教材を読む際も、言語活動とつながる目的を持って読めるようにする。
- ・単位時間のそれぞれの学習活動が、単元を貫く言語活動とつながり、一つ一つの言語活動が意味のあるものになるようにする。
- ・発展では、言語活動を子どもが自力で遂行できるように、単元を通して指導する。

③子どもの主体的な意識を生かす。

「この思いを相手に伝えたい」「この文が大好き」「この情報をもっと知りたい」等、子どもの主体的な言語に対する意識を一層重視する。

具体的な「言語活動を基盤にした国語科の授業づくり」

①読書活動(言語活動)と読解(言語知識・言語技能)を連動させた単元づくりをする。

②読むことと書くことを連動させた単元づくりをすることで、理解と表現を意図的に結び付ける学習を展開する。

③言語活動が日頃の言語生活を豊かにしたり活用したりできるように、単元の導入と終末の構成を工夫する。

④取り入れる言語活動の教材研究を行うとともに言語活動を教師自身が行い、児童への支援の観点をつかみ学習の見通しをもつ。

⑤複数の情報を関連づけながら、情報を加工した活動を取り入れる。(編集・書き換え学習)

⑥児童が単元のめあてをはっきりもち学習意欲を持続できるよう、目的意識および相手意識を明確にした単元を構成する。

⑦単元学習を通して、どのような力がついたのかを児童自らが振り返る機会をもつことで、さらに次の学習に生かせるようにする。

(3) 単元学習を支える具体的な取り組み

① 基礎・基本の充実

言語活動を充実させ、研究主題に迫るためには、基礎的・基本的な言語の能力を習得させなければならない。

基礎的・基本的な言語の能力とは、言語についての知識を正しく身に付け、適切に使ったり表現したりする能力であり、具体的には次のような能力である。

- ・豊かな語彙力と正しく表記する力
- ・正しい文法・内容構成の理解
- ・確かな表現力

これらの能力は、集団学習の場と家庭学習で培いたいと考える。

○集団学習の場で

・音読の基礎をつける・・・一斉読み、個人読み、指名読み、役割読み、グループ読み

・漢字の力をつける・・・繰り返しドリルやノートを活用して漢字の習得を図る

漢字検定を学期に一度行い、漢字の活用力をつける

・語彙を増やす・・・文学作品や詩を暗唱をし、美しい言葉を身につける

詩や俳句、百人一首を活用した学習をする

慣用句やことわざを理解し、活用できる

・書く力をつける・・・原稿用紙の使い方や改行の仕方、会話文の書き方等を身につける。

作文の評価の観点を明確にしたり書く視点を限定したりして、書くこと

に興味をもたせる。

○家庭学習で

- ・保護者の協力のもと、本読みカードを活用して音読学習を積み重ねる。
- ・漢字の力をつけたり語彙を増やしたりするスキル学習は、毎日の家庭学習の中で培う。

②伝え合う学習の充実

(1) 学習形態の工夫

一斉学習、グループ学習、ペア学習、個人学習など話し合いの形態を工夫する。

(2) 学習活動の工夫

- ・1時間の授業のめあてを明確にする。
- ・「話す・聞く」「書く」「読む」学習活動をバランスよく授業に取り入れる。
- ・一斉音読や書く活動、グループ学習など、全員が参加できる学習活動を工夫する。

(3) 話し合い活動の工夫

- ・1年から6年まで統一したハンドサインを活用する。
- ・ペアで対話をしたりグループで話し合ったりする場の設定を工夫する。
- ・お面をつけてプレイしたり寸劇を取り入れたりして、話し合いに臨場感をもたせる。
- ・相互指名や無指名発言を取り入れ、意欲的に話し合いができるよう工夫する。

③読書活動の充実

子どもは読書に親しみ、その習慣を身につけることによって、豊かな感性や情緒、思いやりの心が育ち、登場人物の考えや行動にふれることによって、人間としてのあり方や生き方を学ぶ事ができる。

本校では、国語教育の中で読書指導を進め、子どもの読書習慣が身につくように力を入れてきた。ただ、近年、テレビやゲームの映像文化の発達に伴って、子どもの生活様式が大きく変化し、読書離れが深刻になってきている。したがって、学校だけではその指導に限界があり、家庭との連携を図りながら取り組んでいる。

○子どもが読書に親しみ、望ましい読書習慣を形成していくために

- ・図書館教育の充実を図り、教科学習（主として国語教育）と連携しながら、読書指導に力を入れる。
- ・昼休憩後、10分間の「読書タイム」を設定し、読書に親しむ習慣を身につけさせる。
- ・家庭での読書習慣定着のために、保護者への働きかけを積極的におこない「うちどく」の推進を図る。
- ・学校図書の実態と貸し出し体制の整備及び関連備品の充実を図る。